

# 凌叔華と 1959 年日本を歩く - 「重遊日本記」

星野 幸代

本稿は、在英の中国人作家凌叔華（1900-1990）が、60 歳を目前にして三度目に来日した際のエッセイ「重遊日本記〔日本再訪記〕一～十」<sup>1)</sup>を読み、当時の世相と照合しつつ、凌叔華が当時の日本をどのように観察したか、翻ってこの日本旅行は彼女にとってどのような意義を持っていたか、考察するものである。

凌叔華の小説については、五四時期文学では必ず言及されるとともに、近年フェミニズム / ジェンダー文学批評においてしばしば研究が見られるようになったが<sup>2)</sup>、エッセイであるためか「重遊日本記」に関する研究は見たことがない。

## 1. 凌叔華と日本との縁

凌叔華は「重遊日本記」以前に日本に二回滞在している。

最初の滞日は 1911 年春ごろ<sup>3)</sup>、姉五人と兄一人、父の妾の一人「謝氏」と一緒であった。そもそも凌叔華の父凌福彭は直隸布政使まで昇りつめた官僚で、1903 年に袁世凱の命を受けて来日、東京監獄などを視察したことがあった。<sup>4)</sup>それ以降凌福彭は、子女たちに日本で教育を受けさせる考えをあたためてきたらしい。凌叔華たち兄姉妹七人ははじめ京都〔住所不詳〕に、後に神戸市下山手通〔現・神戸市中央区下山手通〕に住み、神戸の華僑の子女を対象とする同文学学校（現在の神戸中華同文学学校）に通った。家庭教師をつけ、下女を雇うなど余裕のある暮らしぶりであったらしい。しかし翌 1913（大正 2）年夏、神戸市の名瀑である布引の滝で姉三人と兄が溺死したため、残された凌叔華たちは急遽帰国させられた。

二度目の滞日は 1927 年 10 月～1928 年夏で、結婚して間もない夫陳源（1896-1970）が北京大学研究員として派遣されたのに同行し、主として京都市左京区浄土寺に住んだ。陳源、凌叔華のエッセイによれば、普選に対する世評を興味深く観察し、文化交流としては谷崎潤一郎や中国文学研究者の倉石武四郎らと会談したり、富士登山を楽しんだりしたらしい。<sup>5)</sup>

この二度目の滞在を背景として、凌叔華は日本を舞台とした小説を 1930 年代に三篇発表している。<sup>6)</sup> 三篇のうち後の作品になるほど日中の関係を反映して緊迫した内容になるものの、日本人側の事情や心情を描きこむことにより、類型的な日本人による中国人イジメの小説になることを免れている。

## 2. 1959 年来日の足どり

凌叔華は 1946 年以来イギリスに滞在していたが、1956 年秋、中国文学講師としてシンガポールの南洋大学〔現シンガポール大学に合併〕に赴任した。<sup>7)</sup> それ以来、休暇のたびに日本へ行ってみようかと思いつつ、幼年時代の「美しい夢」のような記憶と、新婚時代に訪れた「日本の全盛時代」および中国本土を侵略した「皇軍」の記憶の間でためらっていた。ついに 1959 年の旧正月休暇に日本旅行へ出立したのは、同じく欧州を流浪する画家であり、日本で合流した張大千（1899-1983）の訪日に合わせたのであろうか。<sup>8)</sup>

1959 年 2 月、凌叔華の訪れた日本は、「戦後」から脱しつつあった。<sup>9)</sup> 1950 年代後半には、プロパンガスが家庭に普及し始め、電気冷蔵庫・洗濯機・掃除機が三種の神器になり、炊飯電気釜、合成洗剤が普及するなど、ライフスタイルの大転換が起きている。食糧事情を見ると、インスタント食品時代の幕開けとしてチキンラーメンが考案され、初のパン量産会社「明治パン」が設立、缶ジュースが登場する。その一方、58 年厚生省『栄養白書』は日本人の四人に一人が栄養不足であり、動物性蛋白をもっと摂取するよう警告している。風俗としては、東京有楽町の日劇のウエスタンカーニバルがきっかけでロカビリーブームが起きている。また、凌叔華来日の二ヶ月後には皇太子ご成婚を控え、ミッチーブームにわいていた。凌叔華が車窓から眺めた銀座には、白いコート、毛皮のストール、ヘアバンドなどをした女性たちが見られたはずである。

香港経由で横浜に下り立った凌叔華は、東京在住の友人〔不詳〕に迎えられ、東京に車で向かう。その後、彼女は次にあげる名勝や美術館などを観光したらしい。

東京：上野公園、皇居、上野国立博物館、国立近代美術館、神田古書街。また松竹歌劇団、歌舞伎、人形浄瑠璃を鑑賞。

鎌倉：大仏、瑞泉寺

京都：京大人文学研究所、金閣、銀閣寺、京都博物館。

奈良：東大寺、春日大社、二月堂、三月堂。

一覧すると一般的な観光コースと重なるものが多いが、エッセイを読むと凌叔華の目的が二つ、顕著に浮かび上がる。一つは日本の所蔵する中国名画巡りである。そのために各美術館、博物館では館長とかけあってまで常設していない水墨画を出してもらい鑑賞している。もう一つは幼年時代及び二十代の思い出巡りである。

このうち画家の張大千、王濟遠（1893-1972）と同行したのは鎌倉旅行で、張大千の友人杉村氏〔不詳〕に案内してもらっている。鎌倉の錦屏山瑞泉寺は四季折々の花の咲き乱れる花の寺であり、杉村氏がもし凌叔華が『花之寺』（1928、新月書店）を代表作とする女性作家と知って案内したとすれば、粋な計らいであった。

### 3. 凌叔華の日本観察

「重遊日本記」から、凌叔華の日本または日本人に対するコメントを追ってみよう。

約三十年ぶりの来日に対する凌叔華の恐れに似た気持ちは、英国の中国文学・日本文学研究者アーサー・ウェイリーとの会話で表現されている。

私はロンドンで初めて彼に会ったときにたずねた。

「いつ中国にいらしたのですか？」

「行ったことがないのです」彼は答えた。

「今後きっといらっしゃるおつもりでしょう？」私は、彼が中国文学に透徹しているのを知っていたので、行ってみたいに違いないと思ったのだ。

「今後ですか、やはり行きたくありませんな」意外にもおもむろに彼は応えた。

「行ったら幻滅するんじゃないかと心配なんです、お分かりになりますか」彼の痩せた顔には何とも言いがたい苦笑が浮かんだ。その表情を忘れることは出来ない。

第二次世界大戦を経て日本はどのように変貌したか、「温かく美しい思い出が現実に黒く曇らされるのでは」という恐れ、また中国で横暴を振るった国にどのような心持ちで降り立てばよいのかという迷いが、次のくだりにうかがわれよう。

第二次世界大戦が終わって以降、日本は歯を食いしばって拳国に務め、五、六年もしないうちに多くの心ある人の共感を勝ち得た。特に近年日本は各国で大規模な絵画、演劇、工芸品の展覧会を催し、芸術的に独特のアジアの静けさと風格は平和を象徴しており、血の気の多い西洋人にとっては清涼剤のようであった。...〔星野略〕...中国人の方はといえば、本来旧悪を根に持たない民族であるし、近年すでに「もともとルーツは同じ」という感情をしだいに取り戻し、日本を賞賛し見に行きたいと思っている友人も少なくない。

最後の一文は、訪日を正当づけるための言い訳ともとれよう。

来日第一歩、凌叔華は入国審査官にきれいな北京語で、「中国語〔原文「国語」〕が話せるなら外国語で話さなくてもいいですよ」といわれ、「日本はなんとも人の「心理」を理解するものだ」と心を和ませている。一方で、横浜が「戦後まだ修復されておらず、まだ明らかに貧相」なのは彼女が恐れていた通りであったろう。

東京の中心地の光景は、彼女にとってことごとくヨーロッパの模倣であった。前年に建てられたばかりの東京タワーを見れば次のように思う。

日本がなぜエッフェル塔をまねてもう一つ造らなければならなかったのかわからない。...〔星野略〕...日本固有の芸術性により、独創性をもってエッフェル塔とは違うものを創造できないのだろうか？

国会図書館の前では「なぜこの通りはこんなにロンドンに似ているのだろう」と思い、地下鉄を見ればロンドンの地下鉄を、上野公園を見ればハイド・パーク、東京国立博物館を見れば大英博物館を連想する。「日本が戦後欧米に耽溺し今日に至ったことがみてとれる」、「東京の大建築物が欧米と大同小異だと発見したからには、模倣物を見るのもう時間を無駄にはならない」と、凌叔華はこれらの欧米建築物の受容を否定的に見ている。町中で見られるポスターやキャッチコピーにカタカナで表された外国語が氾濫しているのにも批判的で

ある。

東京に半ば失望した翌日、気を取り直して訪れた先述の鎌倉の瑞泉寺では様々な種類の梅を嘆賞し、また禅寺の風情とお茶のもてなしをいたく気に入って、次のように述べている。

日本人はもともと主人役が上手く、心を込めてもてなし、実にいたれりつくせりで、客を家に帰ったように居心地よくしてくれる。

肯定的ながら冷静で客観的な評価である。

京都に近づくと、筆致がにわかに熱気を帯び、「疎水の河辺の松竹梅は変わりないか、また往年の画家橋本関雪の庭は変わりがないか」と心をはやらせる。クライマックスは「幼年時代に深く愛した山」、嵐山を見に行くくだりである。「こんな寒い日に嵐山へ」と呆れられながら、彼女は京福電気鉄道「嵐山電車」〔1910～18年まで嵐山電車軌道が経営。現・嵐山本線〕に乗る。「また嵐山を見られるんだ」と言い聞かせながら、保津川にかかる渡月橋に夢見心地で立つ。

嵐山は変わらず穏やかに静かで、モナリザのような美しい目で私に向かい合った。

ここでようやく凌叔華は自分の中の日本に合致する日本を確かめ、安堵する。「重遊日本記」の三週間余りを、凌叔華は「本当に住み慣れた家に帰ったように感じた」という感慨とともに、次のように総括する。

東京にしろ京都にしろあらゆる文化芸術、歴史あるものも現代的なものも解説は要らず、手に取ればすぐわかり、景色や鳥の声、泉の響き虫の声でさえ中国と同じだった。銀座のネオンはすこしも中国風でなかったけれど、それは本来の日本の趣きではない。地下鉄の乗客が黙って立っていたり座っていたりする様は、南方の中国人のようではないにしても、北方の中国人に似ている。日本人は中国に行って戦争をして以来、かなりの人々が中国料理を作るのが好きになり、日本本来の「淡白な食事」ではもの足りなくなってしまったそうだ。日本の若い女性も一、二着のチャイナドレスをあつらえ、髪型も中国式をまねて、「劉海〔額に切りそろえて垂らした髪。中国で婦人や子どもの髪型。もとは同様の髪型をした伝説の仙童の名。〕」を額に垂らしている。

この引用の冒頭は、日本の質朴な伝統文化に中国の水墨画の境地を見いだしたと解釈することもできよう。しかし、後半の日本の中の中国の発見は、やや強引ではなかろうか。例えば、凌叔華の言う日本人の「劉海」は、明らかに映画『ローマの休日』(1954年)によって当時流行したヘップバーン・カットである。長く英国にいる凌叔華がそれを知らないのは不自然であり、ユーモアの意図があった可能性も残る。ともかく「銀座のネオン」へのコメントに明らか通り、凌叔華は日本に中国を求めていたことが分かる。

なお、凌叔華がシンガポールに戻ると、学生たちから日本旅行の見所、費用、手続等について問い合わせが相次いだため、凌叔華はそれらをこのエッセイの「附記」として簡便にまとめている。日本のシンガポールでの横行を直接には記憶していない世代が、大学生になったころである。「重遊日本記」は当時シンガポールの青年にとって、画家の目から日本の文化財を解説した独特の観光ガイドという役割を担ったと推測される。

#### 4. 結び

興味深いことに、凌叔華が「中国」「中国人」と書く際、彼女が想定しているのは明らかに民国であり、人民共和国は眼中にない。50年代後半、大陸中国では反右派闘争が吹き荒れ、凌叔華と親しかった女性作家・謝冰心も、夫と息子を「右派」とされ糾弾されている。1958年には大躍進新運動が始まった。東京のタクシー運転手が凌叔華に言った言葉、「中国はいいですねえ。行けなくて残念ですよ。」この「中国」は未だ国交の正常化が遠い中華人民共和国を指していよう。しかしこれに続く「現在日本人はみな中国を支那とは言わなくなった。彼らは「中華」の二文字を自然に口にする。」という凌叔華のコメントは、「中国」を中華民国にすり替えている。同様に、次に引用する結語の「中国人」「私たち」も戦前の中華民国の中国人を指していよう。

現在の日本人は変わり、ちょっと中国人に似てきて、もう戦前のように格式張って虚栄心が強くはなく、堅実な人生の大道を上りつつあるようだ。思うにいつの日か、彼らと私たちは「落葉根に帰し」、地球上において同じ生活を享受するのではないか。さらに私は信じている、そのために戦争の魔の手をくぐる必要はないと。なぜなら彼らはもう戦争の苦さをじっくりと味わったのだから。

凌叔華は、1946 年夫陳源の仕事のため大陸中国を出国し、中華人民共和国建国により政治的立場から帰国できなくなり、フランス、イギリス、シンガポールなどに滞在しながら十三年を経ていた。その様な文脈で「落葉根に歸し」を解釈すると、日本人が古代にならい中国人と一体化するという表むきの意味の裏に、大陸にあった中華民国への凌叔華のノスタルジアが強くうかがわれる。

凌叔華はこの日本旅行において「民国」を含む古き中国を日本に見いだそうとしている。中華民国の中国人として日本を見て、合わせて民国の中国人として日本に滞在したときのノスタルジアにひたることにより、流浪の身のアイデンティティの連続を確保したのではなかろうか。<sup>10)</sup>

## 注

- 1) 「重遊日本記」、凌叔華『愛山廬夢影』新加坡星洲世界書局、1960 年 3 月初版。本稿では陳学勇編『凌叔華文存』下巻（四川文芸出版社、1998）による。
- 2) 近年だけをとれば、梅家玲「女性小説的都市想像与文化記憶 林海音与凌叔華的北京故事」(『性別, 還是家園? 五〇与八、九〇年代台湾小説論』麦田出版〔台湾〕, 2004) 濱田麻矢「女ともだちのはなし 陳衡哲と凌叔華による女学生の物語」(『桃の会論集 三集』2005) などがある。
- 3) 政治家としての凌福彭については、熊達雲『近代中国官民の日本視察』(山梨学院大学社会科学研究所、1998 年) 吉澤誠一郎『天津の近代 清末都市における政治文化と社会統合』(名古屋大学出版会、2002 年) に詳しい。
- 4) 凌叔華最初の訪日を裏付ける資料として『神戸新聞』1913 年(大正 2 年)8 月 11 日 p.4「姉妹四人瀧壺に溺る」を発見した。冒頭は「十日午後五時頃布引雄瀧の下流なる名も涙一ヶ瀧において支那人の姉妹四名がきくも哀れなる溺死を遂げし」、「弟が暑さのあまり水泳中渦に巻かれて溺死したるを見るより... (星野略) ...次々救助に入りながら遂に四名とも溺死を遂げしもの」と推定、溺死者の身元は、「市内下山手通四丁目二十番の二支那人凌福彭方」の息子凌淑桂、長女凌淑英、二女凌瑞清、三女凌大容であることを、母親凌謝氏、四女「涼〔ママ〕淑平」、五女「凌淑〔ママ〕華」が確認したと報じる。
- 5) 陳源「西京通信(一) 谷崎潤一郎氏」、1928 年 4 月『新月』第一巻第二号、凌叔華「登富士山」『現代評論』第 193-194 期、1928 年 8 月 18 日、25 日。
- 6) 「晶子」『北斗』第一巻第二期、1931 年 10 月、「千代子」『文学季刊』第一巻第二期、1934 年 4 月、「異国」『武漢日報・現代文芸』1935 年 3 月 8 日。「晶子」が日本

を単に舞台としているだけで幼児の印象的なある一日をのどかに描いているのに比べ、「千代子」は子どもの間にも広がっている中国人差別を、「異国」は入院中日本人に冷遇される中国人を描いている。「千代子」については拙稿「中国人作家の戦前日本観 凌叔華「千代子」を読む」(『言語文化論集』20巻第2号、名古屋大学言語文化部・国際言語文化研究科、1999年)で論じた。

7) 秦賢次「文林画壇任遨遊 記凌叔華」、凌叔華著、傅光明訳 1991『古韻』、業強出版社、1991年、p.241。

8) 張大千、四川内江の人。中国画家。1920年代には上海での個展で認められ、「南張(南に張あり)」と讃えられた。1949年出国し、欧米に滞在。中国画に西洋の技法を取り入れ、「東洋のピカソ」と称された。晩年は台北に住み、同地で没。台北に記念館がある。

張大千と日本との関連をまとめれば、1917-19年、京都芸術専門学校で三年間染色を学び、1931年「唐宋元明中国画展」代表として短期訪問している(楊繼仁著『張大千伝』文化芸術出版社 1985、上巻 p.57, p.132)。1959年には、兼ねてからの眼病の治療のため渡米するついでに日本を周遊したという(前掲、p.608)。それが偶々凌叔華の都合とあったらしい。凌叔華といつ知り合ったのかは定かではないが、凌叔華も1950年代から数回ロンドンで中国画展を開いていることから(Laurence, P. *Lily Brisco's Chinese Eyes: Bloomsbury, Modernism and China*. South Carolina University, (2003):238-240.) 英国で知り合った可能性が高い。

9) 当時の日本の世相については主として下川耿史/家庭総合研究会篇『昭和・平成家庭史年表 1926-1995』(河出書房新社、1998)によった。

10) ノスタルジアとアイデンティティの関わりについてはデーヴィス(間場寿一・荻野美穂・細辻恵子訳『ノスタルジアの社会学』世界思想社 1990、pp.48-55)による。アイデンティティの追求の過程で、特に不安や不確実な状況のもとで過去をノスタルジアによって鑑賞する際、様々な意味で「良い」過去の自分が現在の自分と結びつくことを確かめることにより、アイデンティティの連続が確保される。すなわち「ノスタルジアによって呼び起こされた過去が私に語りかけるように、私はあの頃、逆境にあっても危険な状況にあっても、人に愛される価値ある人間だったとすれば、たとえ現在、不安や不確実なことがあっても、いまでも私は人に愛される価値ある人間である公算が大きいことになる」。

附記：注4)資料の発見は、平成12-13年度科学研究費補助金・奨励研究(A)の研究  
成果である。